

増山均・汐見稔幸・加藤理編

『ファンタジーとアニメーション —古田足日「子どもと文化」の継承と発展』

(童心社、2016年)

吉岡一志

本書はいわゆるファンタジー論ではない。児童文学作家として著名な古田足日が1982年に発表した「子どもと文化」を、子ども文化研究の最前線で活躍している論者が再検討し、そこから「子どもの成長発達と人間存在そのもの」を解明しようとする彼の思想を読み解き、現代の子ども研究へ継承・発展させることを企図した古田足日論の論文集である。

本書には章番号が付されていないが、掲載順に割り当てると、1章から5章までがⅠ部、Ⅰ部からⅡ部への橋渡しとして6章が位置づけられており、7章から11章がⅡ部と、大きく二部構成の体裁をとる。明確に線引きしがたい論稿もあるが、Ⅰ部は「子どもと文化」の視角を各論者がピックアップして整理、再構成したものであり、Ⅱ部は「子どもと文化」で問題提起がされていながらも未着手となっていた課題に挑んだものとなっている。その意味でⅠ部を「子どもと文化」の「継承」、Ⅱ部を「発展」と言うことができる。それでは各章の具体的な内容を、章題と執筆者を含めて確認しよう。

第1章『「子どもと文化」論の歴史的な位置づけ—藤本浩之輔『子ども文化』論との異同性』（鶴野祐介）は、児童文化論史を整理しつつ、藤本浩之輔の「子ども文化」論との対比を通して、子どもの内的経験に焦点をあてる「子どもと文化」の射程を見定める。

第2章「文化の内面化と子どもの育ち—『文化の身体化』と『生きる力』の獲得」（加藤理）は、古田による「文化の内面化」を「文化の身体化」という表現に置き換え、この「文化の身体化」を土台として「生きる力」が形成されるという見方を提示する。

第3章「古田足日の原体験論・原風景論—社会学的視点からの解説」（山田

富秋)は、古田が「原体験」「原風景」という言葉で捉えた事柄を社会学の用語に置き直す作業を行い、古田の関心が社会学のパラダイムシフトとある程度まで呼应しつつ、個人の独自性に関心を寄せるナラティブ・アプローチやライフヒストリー研究と共鳴することを指摘する。

第4章「子どもの発達とファンタジー—消えつつある“ファンタジーの世界”」(麻生武)は、「生きたファンタジー」という独特の用語で古田の「精神活動の活性化」を捉え直し、ファンタジーが子どもの心に十分に機能するために大人の関与の重要性を強調する。

第5章「『精神の集中・躍動・美的経験』とアニメーション」(増山均)は、古田が焦点化した「精神の集中・躍動・美的経験」と「アニメーション」(「精神の活性化」)との親和性を指摘し、同概念によって「教育」のありようや、大人と子どもの関係性などの問い直しを促すとともに、子どもが育つ地域社会を再構築していく可能性を見出している。

第6章「古田足日の文化的人間形成論—心の二重性をめぐって」(汐見稔幸)は、「子どもと文化」の主題が「心のイメージの二重性」を認め、無意識的に没頭してしまうような「魂、スピリットの世界」が議論の俎上に上がってこなかったことを批判したものであるとして、当時の古田の思考を読み解いている。

第7章「『二つの世界』と子どもの育ち」(加藤理)は、子どもが「発達としての教育」と「生成としての教育」という二つの世界を往還し、両方の世界でいかに「美的経験」が「原風景」を生み出すかを示すことで、「子どもと文化」を発展させる方向を提示する。

第8章「バーチャル化する社会と子ども」(湯地宏樹)は、電子メディアと子どもの関わりが考察され、チクセントミハイの「フロー理論」を援用し、ゲームへの没頭により「精神の集中・躍動・美的経験」がもたらされる可能性を指摘する。

第9章「子どもを取り巻く『環境の再構成』」(木下勇)は、子どもの形成を支える環境づくりの観点から、「近隣の子どもや大人等、人間関係のつながりを築く」場として道路のあり方を模索し、欧州の「コミュニティ道路」政策との比較から「子どもの遊びに対する配慮」について日本の後進性を指摘する。

第10章「文化の変動を推し進めている力」(片岡輝)は、細分化が進む社会

において、個別で多様なチャンネルでつながる多層的人間関係の現代的な様相に、古田の言う「子どものよりよい発達を軸とした文化の体系」を構想する。

第 11 章「〈子どもの文化権〉とは何か」(増山均)は、「子どもの権利条約」第 31 条を読み解き、何もしない時間が保障された上でなされる遊びの本質を探り、その意義やあるべき姿を権利の保障の観点から確認している。

以上見てきた通り、各論者の「子どもと文化」に対する着眼点や解釈に差異はあるものの、概ね古田が「精神の集中・躍動・美的経験」という子どもの内的経験を重視していたことへの着目はどの論者にも共通している。子どもたちの「精神の集中・躍動・美的経験」が達成されるメカニズムの解明、その記述の方法、さらに、その経験を促進する環境整備や大人の関与のあり方、またその視点の社会的な影響力を現代的な社会背景に即して議論した論稿と要約できる。このことから、当時古田が問題提起した課題を、まさに現代に継承し、発展させるといふ本書の試みは十分に達成されていると言えよう。

しかしながら、評者は読み進めるうちにある距離感を抱くところもあった。それは多くの論者が共有するもう一つの問題意識とかかわる。すなわち当時古田が懸念していた子どもの育ちを支える環境が現在はさらに悪化している、あるいは、まだ十分に整っていないという感覚である。古田も指摘するように「遊びも含めて戦前からの伝統生活様式の破壊」による「文化的に困難な状況」に子どもたちが置かれているというのである。

しかし、1981年に生まれ「伝統的生活様式の崩壊」、「消費文化」、「学歴信仰」を所与として育った世代である評者は、大人が嘆く当時の社会を「こんなもの」と受け入れ、取り立てて「文化的に困難な状況」を感じることなく、それなりに「精神の集中・躍動・美的経験」をしてきた。また、60～70年代以降未成年による自殺や凶悪犯罪が増加したとは言えないと社会学者も指摘するように、1950年生まれの父親が語る子ども時代を聞くにつけ、評者自身が「暴力」から解放された時代に生まれたことに安堵した記憶がある。

となれば、古田が、そして本書の執筆者がますます関心を寄せる現代の子どもの生活環境は、悪化、破壊と言った言葉では捉えきれないだろう。古田をはじめ、本書の執筆者は、おそらく戦中から70年代以前までの社会のありようと、そこに生きた子どものあり方が、どこか「自然」あるいは「本来の姿」

に見えているのではないか。変化を常態として生まれ育った評者が抱いた距離感はこれである。

社会も子どももまたその関係も変化するものである。したがって「子どものため」だけでない多様な文化の中で子どもたちの内的経験に迫ろうとした古田の視角は、世界の複雑さや変化を捉える可能性を含みこんでいる点で卓見であった。しかし、子どもの内面を強調するあまり、そこに一人の子どもしか存在しない世界が想定されてはならない。子どもたちは様々な制度のなかで、大人や同世代の子どもたち、メディアなども含み多様な人やモノとかかわりつつ、常に自身の位置を変えながら生きている。つまり、その時々で模様を変える人間関係の編み合わせとして子どもの経験は議論されなければならない。

例えば、評者の“ファミコン”をめぐる記憶をたどってみよう。評者は宿題の時間を持ち札にファミコンをする時間を母親と交渉し、その都度許可をもらってはじめてプレイすることができた。しかし、「うっかり」を装いつつ、いつ怒られるかどきどきしながら約束の時間を越えて興じることもあった。また、10歳も年の離れた姉にファミコンで大勝利をおさめ、「家来」のように扱ったこともあった。もちろん「家来」にもなったが。

私的な事例ではあるが、ファミコンを通じて多様な人間関係の網の目の中で様々に駆け引きが行われていることがわかるだろう。そこはファミコンとそれをプレイする子どもだけが存在する世界ではないし、これまで取り結んできた大人—子ども関係がファミコンを通して反転することも強化されることもありうる。さらに言えば、義務として課された宿題さえも、交渉のカードにしてしまう。子どもたちは自律と他律の両極を行きつ戻りつし、他者と様々な関係の糸が織りなす網目の模様を巧みに調整しながら生活し、「精神の集中・躍動・美的経験」を達成するのである。

このように、個々の子どもの内的経験は決して他者から隔絶された状態で生じる固定的なものではないのである。「過程としての文化」とは「子どもと文化」で古田が用いた言葉であるが、人やモノとの関係が常にバランスを変えながら刻々と変化していく“過程”として社会や子どもを見る時、そこに「本来の姿」は想定できなくなる。常に変化するものに「本来の姿」などないためである。変化の激しい社会に生まれ育った次世代の子ども研究者にこそ、流動的な、つ

まり、いつまでも“過程”にあり続ける「子ども」を関係性の中で捉えるという新たな課題が課せられているのではないだろうか。奇しくも、評者は、かつて古田が勤めた山口県立大学で、子ども文化研究を託されている。なんとも、荷が重い。